

2019年12月号

今月の俳句 中村和弘

<五位鷺>

人影の差せば伊勢蝦退りけり

天辺の鷺の古巣に初日かな

五位鷺の生簀を覗き冬の月

滑走路は海へ消えたり初霞

鷺の巣の小枝を奪い初鳥

海鳥の千羽狂える初日かな

停船の全灯したる初霞

無人島の墓をひきよせ初景色

コーラスの唇赤きクリスマス

酒樽の箍（たが）青々と淑気かな

タンカーの瓦斯も石油も初荷なり

源泉の噴煙激す初御空

象亀（ゾウガメ）は兜のごとし冬菜食む

初松籟砂丘の砂の流れけり

張子の岩の燻し銀なり初舞台

※ルビは、ソフトの都合で、下線の字に対してカッコ（ ）で表しました。

今月の俳句 大石雄鬼

<からだ>

正露丸くつつきやすく天の川

レントゲン車にふはつと入る九月尽

胃もたれのやうな芒が窓にあり
心臓が港となりて雁渡る
後頭部さすれば秋の雲がある
目の奥の激流となりきりぎりす
洗濯機のやうなからだや秋暮るる

陸・この20句 中村和弘選

俳句	作者
秋風の奥に棲むもの鶏に見ゆ	(故)泉 風信子
秋灯しはばかりながら白目澄む	瀬間陽子
麦の芽やわが悲わが影透きとおり	吉本のぶこ
油浮くホルムズ海峡二日月	木下弘子
横綱の重なりて墜つ遠雷	小竹ヒサ子
白光に眩みて鴟を見失う	上田桜
戦場ヶ原鹿除けの木戸濡れてをり	秋元道子
農協に商う墓石灼けて立つ	荒堀かおる
長い橋渡りし島にも蟬の声	大泉秀明
山伏や屋形船の灯川に溶け	田中眞青
夏岬つり橋揺らす北斎ぞ	本多洋子
暴風過梢スクラム組みしまま	石堂つね子
秋祭囃す男の一人消え	西牟田ふみ子
送り火の火跡の水の残りけり	及川明子
畔道の幾年歩み草の花	小保方京司

町の名に残るドブ板秋暑し	河重卓三
夢殿の宝珠に月の火焰かな	猪狩鳳保
一枚の瓦重たき台風過	前塚かいち
八月や仁王の瞳曇りをり	雨宮和彦
水やればいきなり太るきゆうりかな	松浦廣江

2019年11月号

今月の俳句 中村和弘

<海亀>

魚の腸海へ流して涼新た

船腹をホースで洗い涼新た

隠岐牛の糞どつしりと秋深む

古池も月の色なり月登る

これよりぞ流木ならん秋出水

流木が家を貫き秋出水

狼の護符も泥染(じ)み秋出水

深海魚渚に溶けて秋暑し

新月に海亀(かめ)這いし跡直とあり

牧牛のどれも反芻秋ふかむ

※ルビは、ソフトの都合で、下線の字に対してカッコ()で表しました。

今月の俳句 大石雄鬼

<ストローの袋>

ねぶた終へセンターラインの鮮やか

水澄んで体温計の小さく鳴る

ペルセウス座流星群の下に足

眼鏡玉ぎらぎらしたり雁帰る

葡萄園よりも大きくあくびする

腕組のほどけにくくて鴟日和

ストローの袋へたばり鳥帰る

俳句	作者
遺書の墨青味を帯びて夜の蟬	岩崎嘉子
綿虫の零してゆきし長夜かな	吉本のぶこ
霧の中よりゼッケンの光り来る	牧 ひろし
夕立や自転車を漕ぐ被曝しに	秋元道子
畳屋の大き一針盆が来る	十亀カツ子
雲の峰幾つも越えて夫の墓	荒堀かおる
月光をたつぷりあびて米をとぐ	大内政江
竜鱗の反りて酷暑の六日来る	及川明子
踏み固められしところを狗尾草	石堂つね子
虹の根にふれおさなごのふらふらと	佐々木貴子
壁のぼる蟻に凹凸見えており	保坂純子
立ちかこむ杉の真青や墓洗ふ	佐々木玉枝
真つ暗なビルにねぶたの武者映り	古川章雨
一艘のエンジン音や天の河	藤川夕海
畏怖の八月ふみこめば樵の森	森井美恵子
かなぶんの落ちて夕餉の仕舞とす	駒木みどり
鰻田の父の長靴灼けてをり	土岐詳恵
大甕の底に錆びたる水鉄砲	竹田晩成
土灼けて鋼のやうな鶏の足	安住正子
精肉店閉ぢる八月十五日	宇佐川うさこ

2019年10月号

今月の俳句 中村和弘

<紅葉の谷>

恐竜もマンモスも入れ天の川

熊皮を軒に吊して天の川

紅葉の谷にセシウムさらに濃し

流氷にロシアの砂土か混りおり

乱闘の尾白鷺乗せ流氷来

白鳩のみ殖す神在り終戦日

共食の鯰眺めて昼寝せり

さやけしやコンと音たて木桶かな

白熱灯霧の粒子の浮びおり

土壁のにおいだちたる土用かな

今月の俳句 大石雄鬼

<眉のあたり>

頂上のかげらのやうな川鶉かな

盆灯笼わが下半身強く照らす

盆市の足の親指内を向く

タンクローリーにくつつきしまま秋蛾死す

もりあがる眉のあたりや雁渡し

鮭風白きからだの吹かれをり

鯊釣りのうしろ姿を置いてくる

俳句	作者
一本の畔がゆきつく在まつり	大類つとむ
マクドナルドのMの輝き梅雨の夜	中村 仿湖
打水や鯨幕より海の見ゆ	泉 風信子
白きもの白く乾いて梅雨明ける	永井アイ子
振り向かぬ足音草に夜半の秋	吉本のぶこ
夏雲のほうへ押される別れかな	瀬間 陽子
夏野に透く廊下の照りのやうな水	加藤 明虫
横文字の機翼浮かせて夏の月	牧 ひろし
草濡れて雷鳴（かみなりしぎ）の降り来たる	秋元 道子
毀れゆく予感のありて蟬の穴	中村 穂
ヘルメット打つ夕立の固さかな	大泉 秀明
石どちの影ぶつぶつと夏至の道	佐々木貴子
冷酒の鱗一片道宏忌	猪狩 鳳保
花筏夜風が吹けば砂丘めく	古川 章雨
梅雨晴れ間花壇の虫のどつと沸き	松浦 廣江
蟻螂の糸ひくやうに生れけり	根岸三恵子
ヒポクラテス指を汚して莓喰ふ	白鳥 青羽
無名戦士の墓に立ちたる夏薊	吉川 孝子
七夕の歌がはじまる見舞かな	駒木みどり
梅雨晴れて朝日に袖をとほしけり	桜田 花音

2019年9月号

今月の俳句 中村和弘

<種茄子>

金魚ふと気配消したる昼下り

八月の気根はつしと地に刺さり

夏草に揺られていたりヤチネズミ

浅間山（あさま）の灰かうつすら纏い種茄子

山刀伐の揚羽消えゆく雲の中

遠州の怒濤枕に寝待月

大鐘の音に飛ばされ秋の蝶

喰い声壁より湧きて秋暑かな

遠州灘の砂をかぶりて大西瓜

馬の鬣握れば熱し盆が来る

今月の俳句 大石雄鬼

<傷>

高尾山よりはらはらと蛇の舌

白湯のごとき鱗でありし濁り鮎

蓮といふ傷がひらきつばなしである

箱庭をはみだしてゐる鉄パイプ

反抗期海のにほひの汗をかく

蟬の眼を新幹線のとほるなり

地を強く照らし終戦日の自転車

俳句	作者
幽霊の凧なかなか下りて来ず	大類つとむ
紐解けば花野が崩れさうになる	泉 風信子
砲座朽ちもろ足高き夏蝶よ	吉本のぶこ
虹のいろ使い果たしてごはん焚く	瀬間 陽子
大陸の鉄路に捨つる桜貝	竹内 實昭
池の面に薬剤の渦花菖蒲	小木曾あや子
雉子の声窓つきぬけて洗面所	高橋 時子
十葉の地下茎たどり果てもなし	西牟田ふみ子
梅雨の月深々と顔埋める人	木村 詩織
岸（きりぎし）に突つ立つ山羊と雲の峰	多摩川 州
この道の雲へまつすぐ麦の秋	鳥巢 有子
コンクリを賑やかにして蟻の塚	保坂 順子
夕暮の水道塔を鳥帰る	小林千香子
渺渺と水迫りくる植田かな	田中 七子
虹の橋更地に幣の立ちにけり	山田和歌子
乳絞るバケツの影に牛蛙	三宅 不遜
落し文三つ四つ乗せて川走る	平 惠
蜥蜴去り十六貫の石残る	吉川 孝子
短夜や名取の海と空渾然	小村 寿子
薰風の江ノ島鳶の顔間近	宇佐川うさこ

2019年8月

今月の俳句 中村和弘

<黒潮>

姫川のフォッサ・マグナに雉子鳴けり

供物みな散めきたる半夏かな

橋脚に泥ののぼりて半夏生

姫川の鮎や背鱗に朱のはしる

群鶏の逆毛立ちたる青嵐

海鳥の骸のまとう夜光虫

黒潮におし流されて七夕竹

ジンベイ鮫は袋のごとし七夕来

神代より鮎の苔食む音すなり

川魚の翠の背にも梅雨晴るる

今月の俳句 大石雄鬼

<葉紐>

水滴がわたしのなかにある芒種

ストローに花の咲かない太宰の忌

ふるさとの煙は横に袋蜘蛛

白目さらに綺麗に見えし登山口

葉紐の外に垂れたる夏野かな

蛾がすこしあるいて夢の中にある

袋綴ぢのやうな空よりはたた神

俳句	作者
春風に着地の蜂の脚揃ふ	稲村茂樹
春星に眼差のあり飛旅子の忌	浅沼眞規子
イタドリをポキンと折つて風になる	中村仿湖
昭和の日父の眼に風が棲む	泉 風信子
五月闇いま泣いている匂いする	瀬間陽子
水系の図絵にある田は早色	加藤明虫
万緑に踏み入る気なし老いし犬	小竹ヒサ子
裏声のこぼれてきたる桐の花	佐藤禎子
太陽の神を祀りて豆蒔きぬ	上田 桜
抱く犬の砲弾のよう青時雨	小川葉子
囀や働く方の耳寄する	伊藤泰子
螢鳥賊曳く網蒼し夜の雨	今田 克
春の陽に弾痕翳る広場かな	田中眞青
捨て鉢の大小凸凹緑雨かな	中村 穂
土佐水木花の隙間に月走る	北原千枝
輪転機令和元年告げにけり	萩原君子
ベランダにロミオのごとく初蝶来	小橋めぐみ
蜂の巣を飾る理科室黴匂う	高橋 仁
骸骨のような蟻提げ黄金蜘蛛	小川玖美子
涼風の古墳の丘へ船の鼓動	竹田晩成

2019年7月号

今月の俳句 中村和弘

<水の音>

頂上の岩群現れて月涼し

船底の水の音にも夏盛り

金魚玉竜宮城も容れてあり

種芋の皮のみ残り夏初め

頭の上に飛行船浮く厄日かな

南海の雲の峰まで青きかな

八丈島（はちじょう）の四方を閉ざし雲の峰

蠅虎舟を柁となせるかな

絶壁を上らんばかり青葉潮

夏祭ことに馬体のにおいけり

今月の俳句 大石雄鬼

<人の濁り>

古草をひきずつてゆく玩具かな

ステンドグラスに人の濁りや夏立てり

宇賀神の耳の摩耗や水木咲く

廃屋を目玉のやうな枇杷実る

目ふくらんで修行の滝を見てあたり

ポケットを洗ひ蝮がたちあがる

玉虫の匂ひとつともに仕舞はるる

俳句	作者
花疲れ尻の湿りを持ち帰る	浅沼真規子
飛行機も船も巨大な春の海	當山孝道
和鉄（わばさみ）は糸を切るだけ若葉寒	永井アイ子
滝もまたしろがね造り遺品とす	吉本のぶこ
菜の花や千の蜜蜂等の微震	石川真木子
なのはなや窓ガラス飛び立たんとす	佐藤禎子
切株に大き洞あり黄砂降る	十亀カツ子
朧夜の兎が一匹穴二つ	小川葉子
春愁や肌に吸ひ着く聴診器	牧ひろし
蜃気楼深追い癖の犬を引く	渡部洋一
蛸開く隣の貝を揺らしつつ	伊藤泰子
春の蠅弾みをつけて発ちにけり	杉山よし江
白い蝶南みなみの一羽かな	松浦廣江
乾きし薔薇辞書めくると砕け散る	古川章雨
春夕焼消えて家並が冷めてゆく	佐々木玉枝
城壁は北海へ落ちエリカ咲く	吉川孝子
孟宗竹の皮ぬぐ音のしじまかな	山田恵美子
春かなし鬼哭啾啾儒良（じゅごん）死す	伊藤岳栄
雨垂れや花鳥同じ樹に帰る	小田桐妙女
一本の棒が国境霾れり	松本清美

2019年6月号

今月の俳句 中村和弘

<万象>

跳箱の立ちはだかりて夏めける

夢殿の雨垂れ吸いて蟬の穴

防空壕夏くるたびに臭いけり

青苔に古巢おおわれ熊野かな

千年の苔に刺さりし松落葉

万象のふつと木茸濡れており

白壁に巨きな影を山の蟻

消しゴムの滓の振れて明易し

絹を食う虫紙を食う虫梅雨に入る

護謨燃ゆる臭いかすかに八月来

今月の俳句 大石雄鬼

<家族の淵>

蜆汁よりはみだしてゐる蜆

山羊は食細く生まるる彼岸かな

朧夜を机のやうな犀がゐる

洗剤のかたまりだして絵踏かな

地球儀のふと落ちさうにこどもの日

家族の淵覗くがごとし燕子花

母の日の蜂蜜にいつまでも泡

俳句	作者
太陽を虹の環にして杉花粉	清水山査子
雪割の塊光る雪の上	當山孝道
葉隠れの小鳥の動き地虫出づ	永井アイ子
うつ伏して背の荒き松つちぐもり	加藤明虫
笹舟を流す小川は太りたり	斉藤悦子
啓蟄や戻れぬ虫が歩き出す	堀尚子
トラックの荷のパタパタと山笑う	浪本恵子
天狗党山菜萸の花に潜み居り	秋元道子
蜜吸うて鳥の落としぬ花の骸	上田桜
岩窟の大神殿や燕の巢	根岸三恵子
海苔箸の汐割く緑夕日互 (い) つ	今田克
梅の花匂い起こすは幼稚園	高橋時子
春愁や吸取紙に文の片	及川明子
花冷えやかかるく手を打つ握り寿司	猪狩鳳保
春の闇甕の底より泡ひとつ	中村穂
桃の花手入れするまも開きをり	萩原君子
ほの暗き道のつづけば熊谷草	鳥巢有子
腹巻の遠くに見えて潮干狩	保坂純子
しらうめのしだるる真中狂れてをり	森井美恵子
孟宗の聖堂に降るビバルディ	正木かおる

2019年5月号

今月の俳句 中村和弘

<朱欒咲く>

熊蜂の羽音の中に村沈む

鴉の巣を貫く枝の芽吹きおり

マレー語の太太と在り朱欒咲く

鴉を逆さ吊りして市暑し

古物市の象牙に消えし春の雪

潮騒の休むことなく春しぐれ

木の瘤の数多芽を出す齢かな

山嶺は刃のごとし辛夷咲く

満開の花の死角へ猫奔る

天体は枢のごとし花吹雪く

今月の俳句 大石雄鬼

<陥没>

てのひらの陥没したり遍路宿

轉の粉めいてゐる座禅かな

蜜蜂のがしやりがしやりと空青し

象が鼻うかつにあげて桜咲く

花冷は胸を濡らしてゐるごとし

足下のふたしかな家桜散る

おしぼりを顔にくづせる穀雨かな

俳句	作者
初夢の角笛いまだ鳴りやまず	大類つとむ
家中の万の指紋や年の暮	浅沼真規子
カフェラテの泡のぼつてり鳥つるむ	永井アイ子
春寒や猫が水飲む音密か	石川真木子
飛地なる乾きし処落椿	佐藤禎子
春の夜息つぎ小さく刃物研ぐ	十亀カツ子
寒晴や屋根職人の横歩き	浪本恵子
毘沙門天を閉ぢ込めたる黄砂かな	牧ひろし
水餅を覗けば顔の歪むなり	大類準一
ガラスポットに春月入れてボーイ来る	上田桜
花束に青麦のあり廃炉なり	小川葉子
なまはげの出したる指に絆創膏	伊藤泰子
甘蔗（きび）刈ると不発弾出る礁（いくり）畑	今田克
悲愴聴くタクト静かに氷りをり	木村詩織
凍瀧の高きに時の止まりけり	山田和歌子
年輪のくつきり浮かぶ雨水かな	吉見弘子
早春や子牛に指を吸わせおり	保坂純子
春光の風をはらみて奔る湖	永井良和
佐助や壁に大きく影おとす	杉沢信一
青ざめて結氷空に立つておる	土岐詳恵

2019年4月号

今月の俳句 中村和弘

<杏花村>

泡爆ぜる音のさらなる春の昼

形代の臍の辺りを押して流す

ガジュマルの気根滂沱と春暑し

原子炉の建屋ひきよせ轉れり

石山に初蝶の影乱れけり

カルデラの湖をつらぬき初音かな

妊娠線土偶に太し桃の花

四方より風おしよせる苗田かな

豚の仔の金切声も杏花村

海胆の殻しばらく棘のうごきおり

今月の俳句 大石雄鬼

<天に鶴>

馬の背のやうにギターが冷えてゐる

合掌のがさがさとして鴨帰る

種芋の怪談めきて仕舞はるる

天に鶴ひろがりだして朧月

春の月よりも大きな寝息あり

啓蟄や瞳はいつもあいてゐる

春泥にぶつかるとく妻が来る

俳句	作者
伊左衛門の紙子を包む冬ともし	大類つとむ
立春の喪にふさはしき土踏まず	泉風信子
はしやぐ聲に死んだ吾子ある雪明り	泉風信子
日脚伸ぶ家のどこかがふいに鳴る	永井アイ子
雨降り山かわうそ谷へ鴨撃ちに	岩崎嘉子
見守られ寒満月と家の前	小竹ヒサ子
大寒やすべて消し去る潮満ち来	小竹ヒサ子
口開けて声を漏らさず寒鴉	大類準一
純白の微笑に似たり花甘藍	秋元道子
富士の肩雪吹き上る風が見ゆ	今田述
大統領の赤いネクタイ冬ざるる	伊藤泰子
屋敷神の燭一本や年守る	及川明子
窓越しに昔現る雪もよい	河重卓三
寒夕焼隙間だらけの森に映ゆ	佐々木玉枝
冬滝や鼻腔を抜けて肺に落つ	小林千香子
円かなる安房の磯山冬の月	根岸三恵子
羽化しきり宇治十帖の冬の蝶	菊池雅子
百度石幽けくありぬ冬の梅	藤倉頼江
石地藏真一文字の影氷る	白鳥青羽
熊の糞見しより今だ頂為さず	山田恵美子

2019年3月号

今月の俳句 中村和弘

<田螺鳴く>

土器（かわらけ）はさらに赤味を梅咲けり

日本の赤土におう節分草

神島の牡蠣を剥がせば怒濤くる

開拓の柱残りて冴え返る

深海魚の目のどんよりと春近し

海藻の森のうねりて春日かな

藻まみれの奥浜名湖の田螺かな

日が差せば青み帯びたる田螺かな

義仲の出自を問えば田螺鳴く

東海の松も疎らに白子干す

今月の俳句 大石雄鬼

<てらてら>

羽毛布団ぎらぎらとした足がある

沖に波がしゃがしゃとあり鏡餅

両親のぐらぐらと来し出初式

薬局の目玉てらてら松過ぎる

凧提げて草原になつてゐるつもり

手を深くからだに入れて受験生

梅咲いてがしがし空の明けてゆく

俳句	作者
十二月朝光の輪の芯に起つ	稲村茂樹
こがらしやいくたびも拭く耳の襷	浅見玲子
冬三日月ギターの形になつて逝く	瀬間陽子
池奥の樹下はまだ来ぬスワンの座	杉山鮎水
億年の地層にくさび冬に入る	佐藤禎子
秩父朱と言いたきほどの谷もみじ	浪本恵子
雁行のその鋭角を眩しめる	大野和加子
補聴器より全身に木枯しの吹く	荒堀かおる
<small>対馬</small> 檜の実の跳ねる石屋根島昏る	田中眞青
眼裏の猛き冬陽へ息を吐く	佐々木貴子
着膨れて乳酸菌が一億個	河重卓三
鼬ほど胴長くして岩登り	猪狩鳳保
綿虫を追うて大須の路地に消ゆ	北原千枝
いつ見ても時雨色なる小径かな	田中七子
冬鷗紙となりゆく日和かな	山田恵美子
瓦斯灯の一基点りて神の留守	根岸三恵子
冬桜移ろう季節（とき）の吐息ほど	別所弘子
冬腫や朱糸で繋ぐ絵馬の山	吉川孝子
大燈籠に兵百万の御霊かな	菊池雅子
襟巻きに十一面の埋もれけり	小田桐妙女

今月の俳句 中村和弘

<気泡>

大鯉の金色帯びて冬ふかし

晩白柚座右に据えて徹夜せり

南海トラフ見える如くに初日かな

小寒の幟傾き道の駅

捨て井戸に靄の生れて梅咲けり

絶壁の冬芽つえばむはぐれ猿

二ヶ月の痛々しきは象の罅

節分のますます赤き天狗面

田の面に気泡生まれて春近し

春の鯉家族のように連なれり

今月の俳句 大石雄鬼

<山眠る>

山脈のふらふらとして茶が咲けり

針葉樹林より下がりつつ冬耕す

雁木道曲がれば夜が裂けてゐる

鉱脈の街に湯ざめをしてゐたり

冬雲のながれつきたる角煮かな

ティーバッグに湯気なのこりて山眠る

曇りたる硝子のままの毛皮店

俳句	作者
稲刈の匂ひ茂吉の机まで	大類つとむ
白菜を積み禍霊（まがつひ）を封じ込む	泉 風信子
橋裏は厠明かりや緋桃は炎（ほ）	吉本のぶこ
轟々と竹藪動く神の留守	竹内 實昭
深更の簡易ベッドに毛布畳む	佐藤 禎子
背負はれて田圃離るる敗れ蓮	大野和加子
一灯が点りて声や三の酉	渡部 洋一
竹伐るや陽を吸ひ寄する蟄（かがみ）石	伊藤 泰子
万の頭を垂ればとよむ芒原	佐々木貴子
足袋蔵の隅より釣瓶落としかな	及川 明子
放哉の墓のうらより秋の声	前塚かいち
来る人の影つながりぬ冬落暉	藤川 夕海
樹に登る夕顔一つ夕陽の中	吉見 弘子
門灯に浮ぶ落葉の嵩恐る	田中 七子
冬囲ひかりの道は残しけり	桜田 花音
冬の砂丘駱駝に女陰を委ねけり	小田 桐妙女
中性的な足指さらし湯ざめする	三宅 桃子
文化の日ネイルの星を陽にかざす	小橋 めぐみ
冬うらら雀跳ねをる力石	渡辺 扇大
鼠一匹飴をもらひし豊の秋	松川 和子

2019年1月号

今月の俳句 中村和弘

<喇嘛(らま)僧>

井飯飛んで来たるか年詰まる

熊切村字川上の寒卵

血痕のうつすら残り寒卵

大寒の鼠の齧る柱無し

提灯の肋浮き出て郷に入る

古代鱧の巨骨を秘めて山眠る

牡蠣殻を砕けば鶏の集まり来

白菜をシルクロードの驢馬が負う

数え目の数珠の如くに喇嘛(らま)僧来る

ブロイラーの鶏冠波うつ初日かな

今月の俳句 大石雄鬼

<翳り>

撫で牛の目玉はみだし秋暮るる

石膏の翳り強まり鶴来たる

喉仏のごときのうねり冬の海

縁石に秩父夜祭ちかづけり

着ぶくれて白夜のやうなからだかな

首すこし長く煮凝喰うてをり

焚火よりはなれし舌の太かりし

俳句	作者
のぼりゆく汽水のあぶく厄日前	浅沼真規子
しろがねの秋刀魚が運ぶあいや節	岩崎 嘉子
花野より喪にふさはしき顔が来る	泉 風信子
蜘蛛の囿の流れし一縷光り顕つ	加藤 明虫
兄恋し殿様飛蝗の初々し	石川真木子
男根の祠の中へ昼落葉	大類 準一
賜ないてグラスボートにひびくかな	品川弥寿子
琴ピアノ雨の藁屋の蘆花忌かな	今田 克
秋曇り船の汽笛が街包む	西牟田ふみ子
無月なり包丁とぎて兄帰る	本多 洋子
鶏頭花防犯灯にぬつと出る	萩原 君子
月天心何処に寝ぬるボランティア	河重 卓三
流れゆく鴨の親しさ銀木犀	藤川 夕海
新米の秋田小町が兄と来る	佐々木達治
はらはらと金風吹きて道祖神	森池 義子
釘穴固くなりゆく秋はじめ	村上鮎黒朗
あけび熟れ土蔵の裏に誰も来ず	北原 千枝
集合は綾取橋や秋夕焼	松本 清美
反射炉のほむらはるかに銀河かな	土岐 祥恵
軍犬軍馬野に捨て来しと月の余話	菊地 雅子